

有島武郎全集

第三卷

大正十三年五月廿五日印刷
大正十三年六月五日發行

(非賣品)

著者 有島武郎

發行人 足助素一

第三卷
印刷人 島連太郎

印刷所 三秀舍

發行所

叢文閣

東京市牛込區神樂町二丁目十一番地

電話牛込 二五七三番
振替口座東京 四二八八九番

有島武郎全集 第三卷

目次

石にひしがれた雑草	一
生れ出づる惱み	八一
ある六月の日記	一六一
武者小路兄へ	一七一
讀者に	一七七
私の友達	一八三
若き友に	一八七
大なる健全性	一九三
自己と世界	一九九

旅する心	二〇七
運命と人	三〇五
予に對する公開狀の答	三一五
私の父と母	三二一
小さき影	三二七
御嶽教の中教正となつた祖母	三四三
批評といふもの	三四七
松井須磨子の死	三五三
『リビングストン傳』の序	三五七
將來の新劇團に對する二三の註文	三九一
春	三九五
往來雜記	四〇三
若き友の訴へに對して	四〇九
帝展の日本畫より石山氏のそれへ	四一七
サムソンとデリラ	四二一

大洪水の前	四七九
聖餐	五四三

口 畫

圓山（一九一四年作）	（卷頭）
------------	------

有島武郎全集 第三卷 目次終

目次

石にひしがれた雑草

姿を隠す時が来た。何を愚圖々々のさばつてゐるのだと心の中で君に呵責さうなまれる時も果てた。君と一緒にこの地球の上にゐながら姿を隠すのか、或はあの世に姿を隠すのか、そんな事は詮議してくれるな。縦令ひ詮議した處が無駄だ。僕が姿を隠した後に、君はこの置手紙一つの外は何物も見出さないだらうから。嗚呼、一體僕はこの世の中に何をする爲めに生れて來たのだ。何になる爲めに生れて來たのだ。人を殺す爲めに!? 而して一人の道化役クラウンになる爲めに!? 笑へ、笑へ。豚も海鼠も、さけるまで口を開いて笑へ。而かも僕が笑へといへば、彼奴等すら笑ひかけた口を結んでしまつて、しかつめらしく僕を尻眼にかけるに違ひないのだ。(こゝで僕は一言、「馬鹿」とか「畜生」とか、捨臺詞がいつてやりたいのだが、僕の胸のすき切る程の臺詞は生憎まだ日本語には發明されてゐない)

姿を隠す前に、僕は君の戀人であり、僕の妻である女子なまごを生殺しにした頭末を君にだけ知らせて置きたいと思ふのだ。僕が何か目的があつてそんな事をしたと思つてはいけない、僕には目的はない。目的などがあるものか。

君を悲しませようとするのではない、苦しませようとするのではない。人間が好んで運命を狂はせる、その醜い姿を見せつけようと云ふのでもない。運命が人間を弄ぶ、その沒義道な戯れを思ひ知らせようと云ふのでもない。況してや君を喜ばせようと企むのでもない。僕は唯々何んだか君に書き残して置きたいと思ふから書くだけの事だ。強ひて目的といへばそれだけのものだ。君がこの置手紙からどんな結論を引き出さうとも、それは僕の知つた事ぢやないのだ。何んにも目的がなくなつてしまふと、人間の姿といふものが可なり露骨に見え透くよ。惡魔の眼が冴えてゐるのも多分はその爲めなのだらう。

三つ兒の魂百までといふが、考へて見ると、人間も随分變るものだ。二人が〇〇大學にゐた時はお互に生眞面目な青年だつたね。僕がこんなになり果てようとは、その時どうして考へ得られよう。まあ然しそんな事はどうでもいい。

君も覺えてゐるだらう、二人ともB先生の歌留多會に招かれた晩の事を。そして始めてM子に遇つた時の事を。顔も心も煤けたやうな人でありながら、Bさんははしやぐ事の好きな人だつた。どんな遊戲でも科學的に綿密な研究をして、機敏さうもない風をしながら妙に上手だつた。君なんぞは中々練習も積んでゐて、敏捷い質だつたのに、先生に刃向ふといつても散々に負かされてしまつた。その中にM子だけは五角だつたので、二人だけで勝負をさせようといふ事になつた。その時だ僕がM子に牽き付けられてしまつたのは。

M子は色々と辭退してゐたが、辭退し切れなくなると、死に身になつたやうな顔をして、ぼうつと頬を赤めなが

「それぢや一寸お待ち下さいましね」といつて一人で臺所の方へ立つて行つた。この勝負に非常な興味を催した一座はM子の歸るのを今や遅しと待ちうけてゐたが、思つたより暇が取れた。いつでもせか／＼と細かい事に氣の付くBさんは、M子が勝手を知らないを見て取つて、僕に行つて見てやれと命じた。始終家の人のやうにB家に入出してゐた僕は、命ぜられるとすぐ座を立つて、廊下から唐戸ドアーを開けて食堂の方へ出て行つた。食堂は眞暗だつた。そこに圖らずも僕は女のくす／＼と忍び笑ひをする聲を聞いた。

「どなた？　ちよいと電燈のスイッチをひねつて下さいましな。どなた？　（こゝで彼女は廊下から来る光で僕を透かして見てゐるやうだつた）Aさんぢやいらつしやらないの」

「さうです」

僕はもうしどろもどろだつた。

「Aさん？　ぢや、ちよいといらしつて頂戴。こんな馬鹿な事をしてしまひましたのよ」

いたづら／＼した聲が小さく艶めかしく又かう響いた。僕の眼はまだ闇には慣れてゐなかつたから、その時の處置としては電燈を點す事が一番早道だつた。僕はそれを感じてゐた。その癖さうはせずに、僕は手探りで聲の方へ近よつて行つた。

「こゝですわ」

いきなり濕りつぽい、柔らかな、案外冷たい小さな手が僕の手をやりわりと握つて引き寄せた。はつと思ふま

に僕は、M子と着物を觸れ合ふ程の近さに立つてゐた。鼻の先きにはあの惡魔的に人を誘惑する日本鬚の半分腐つたやうな濃厚な匂ひがむせる程漂つてゐた。

「こんなに。ね」

さういひながらM子は僕の手を握つた自分の手を前髪の所に持ち上げた。僕は自分の手がM子の手よりも冷えて行くのを感じながら、もつと冷たい、若い女の髪の毛といふものに始めて觸れて見た。その無類な繊細な感じと、いひ現はし難い快い弾力とは、僕の注意を本能の奥底まで浸み込ました。僕の指はそれをぐつと握りしめた。欲念でのたうつた。

「こゝですよ」

M子がもう一つの手を添へて僕の指を導いた。そこには天井から下げられた鐵條はりがねのランプ釣りが髪にからまりついてゐた。

M子は中腰になつてぎこちなさうに立つてゐる。そのふつくした胸は僕の胃部の邊で觸れたり離れたりする。その暖い臭氣は時々僕の頸の邊に流れて来る。僕はいつまでもさうして居たい心持と、座敷の人々の思はくを氣にする心持で、わく／＼しながら、震へる手先でランプ釣りから前髪をほごさうとあせつたけれども、暗くはあるし埒が明かなかつた。M子は段々じれ始めて來た。

「取れませんか……まだ……取れませんか……痛い」

僕は始めて電燈をつける氣になつて、M子から離れてスウィッチをひねつた。二人はまざ／＼と灯の光に照らされた。

「どうなすつて、眞青なお顔をなさつて。駄目ですわねどうせ。あら、こゝにこんないゝものがありますわ」

さういひながらM子は頭を据ゑたまゝ手を延ばして、ミシン臺の上にあつた大きな裁縫用の西洋鋏を取り上げた。而して左手でいゝ加減に前髪の一部をつかみ丸めながら、容赦もなくじやきりとそれを切つてしまつた。

眞黒な毛が一束切り揃へられて、眞白な富士額に房々とふりかゝつた。とめる暇もなかつた。僕は茫然としてその艶美な亂暴を見守るばかりだつた。

「亂暴ですね」

「だつて早く先生を貰かして上げたいんですもの。今水をいたゞいて歸つて來ると、いきなり前髪がこんなに引かゝつてしまつちやつて、……もうようござんすわ、どうも難有う御座いました。さあ参りませう」

さういつてM子は僕の存在を無視したやうに、どん／＼一人で廊下の方へ出て行つてしまつた。僕は夢からさめたやうに物足らなく思ひながらその後につゞいた。と、座敷に這入らうとする所で、M子が戸のハンドルを握つたまゝ立ち止つたので、勢ひよく歩いて行つた僕は危く彼女にぶつからうとした。M子は片手で前髪を器用にかき上げながら振り向けた時れ／＼しい顔をまともに廊下の電燈に照らして見せた。

「祈つて頂戴ね。どうぞ。屹度勝つてお目にかけますわ。いゝこと？」

その眼は接吻しろといはんばかりに物をいつてゐた。然し次ぎの瞬間に彼女はもう廊下には立つてゐなかつた。

全くその時の勝負は一座の人気を湧き立たした。B先生に加勢するものとM子に加勢するものとが二手に分れてひしめき合つた。君はM子の側に坐つて、手を出してM子を邪魔せんばかりにして、Bさんに加勢してゐたね。僕は黙つたまゝ、大勢の後ろに突つ立つて、腕組をして二人の勝負を見てゐた。本當は二人を見てゐたのでもない、勝負を見てゐたのでもない、M子を孔のあく程見つめてゐたのだ。彼女は斷ち切つた前髪の動ともすれば額に落ちかゝるのを左手で押へつけながら、落ち着き拂つて戦つてゐた。高い所から見おろしてゐる僕の眼には、襟足の美しい、脂の乗つた眞白な後頸うなじと、こゝむので抜衣紋になつた、強い刺戟を與へる半襟と、高く大きく背負ひ上げたお太鼓の帶とが、揺れたり靡いたりして、ちか／＼と眩しく映つた。

「誰れが一體この女を獨占するやうになるのだらう。あの髪を、あの後頸を、あの女に似合はしい衣類を、而してその美しい着こなし方を。あの女が誰れにも獨占されるのでなければ、俺れも別に獨占する氣はない。俺れは靜かにあの女を嘆美してゐればそれで済む。が……」

然し誰れがあのもゝでM子を捨てておくものかと思ふと、僕はこみ上げるやうな嫉妬を誰れにもなく感じて來た——ゐても立つてもゐたゝまれないやうな嫉妬を。僕にはM子の心の自由に動くのが呪はれて來た。人の心の自由に動くのが呪はれて來た。何か一思ひに殺してでもしまへば始めて安心が出来るやうな嫉妬だ。而して僕

よりも確かに年上らしい、恐らく才はじけたM子に、僕がどう映じてゐるかを推測すれば、この奇怪な嫉妬は尙更ら高じるばかりだつた。M子を見つめたまゝ、僕は興奮で脂に濡れた手で顔を撫で廻すやうに見せかけながら、手の平に残つた前髪の移香を嗅いだ。それから大事に手を握りしめて又胸の所で組み合せた。

「萬歳！」

突然こんな聲が聞こえたと思ふと、群がつてこゝみにりに坐つてゐた男女の客が一齊に腰を伸ばして兩手を擧げた。勝負がついたのだ。M子が勝つたのだ。電燈が急に華やかに光り出したやうに見える中で、B先生はいつもの燦んだ顔に燦んだ微笑を浮べて、残つた札を數へてゐた。M子は今までの沈着に似ず、すつかり上氣して晴れ／＼と愛敬笑ひをしてゐた。その眼の活々とした輝き、尋常な癖に大きく見える表情深い眼の！ がや／＼いふ中で君は何かM子に抗議を持ち出してゐるらしかつた。M子は自分の味方になつてくれた人々に訴へるやうに、あちこちに眼を流しながら、辯解してゐた。僕はその一瞥を一心に待ちうけてゐた。その勝利を祈る筈だつた僕が、M子の一瞥を恵まれるのは當然だつたのだ。けれども彼女は仕舞まで僕の存在を無視したやうに振舞つた。僕の眼は輝いたけれども、彼女の眼はとう／＼僕の上には輝かなかつた。何事も明らさまな、あるがまゝな一座の中にゐながら、僕一人は暗い淋しい迷路をぐる／＼と迷ひ歩いてゐた。勿論誰れもそんな事を氣取らう筈がない。それは僕にとつて、都合のよい、同時に堪らない程物淋しい事だつた。僕は弱者らしく氣むづかしくなつて君とも碌々口をきかなくなつてしまつた。君はそんな事に氣もつかかなかつたらうけれども。

歸る時にB先生はM子の家が僕の近所だから一緒に行くやうにと云つた。一種の反感と諦めから僕は割合に冷淡にM子と連れ立つて、人通りの少い寒い夜の街を歩いた。自分の手の届かない物をあまのじやくから眞價以下にまで見下げる、あの心持で僕はM子に對してゐた。それにも係はらずM子は獨りではしやいで、B先生との勝負のいきさつを、嬌めかしい小刻みな笑ひで句點をうちながら、熱心に語りつづけた。女の自己主義がかういふ時には極端に發揮される。そんな場合女といふものは相手の心持などではてんで考へてはゐないのだ。それが又馬鹿々々しい事には、云ひ知れぬ蠱惑的な無邪氣な愛嬌として男の心を捕へるものなのだ。さもない男の心だ。僕は街燈の下に來ると、思はず、知らん振りをしながらM子を偷み見した。見得をする必要のなくなつたM子は富士額に前髪のたれかゝるのをかき上げようとはしてゐなかつた。肉感的な程度に悋鬱な眉頭に散らばつた一房の髪の毛は、彼女の魅力を自然に強めてゐた。身だしなみを崩した放恣な姿がそこに暗示されてゐた。彼女はまた話しながら絶えず右手の甲を脣にあてては接吻するやうに吸つた。注意して見ると一條長く蚯蚓脹れが出來てゐた。彼女が手の甲を脣に持つて行つたんに、僕の胸はおどましくもときめいた。負け惜しみをやる僕の心をすつかり見抜いてるもう一つの僕の心は、興奮に熱したり皮肉に冷えたりした。兎に角僕はM子が醸した惡酒にしたゝか酔ひしれてゐたのだ。

別れる時に教へられて見ると、思ひがけなくもM子は僕のゐる親類の家のすぐ隣りの小綺麗な二階建に住んでる事が知れた。別れ際になるとM子は急に僕に對して恐ろしく親しげな風を見せ出した。M子はとすると此方

で恥かしくなるまでひた／＼と僕に身をすり寄せて來たりした。

「こんなに近く住まひながら私今まであなたのお姿も見ませんでしたのよ。不思議ですわね。ほんとに不思議ですわね。でも口惜しいわ。馬鹿にされてたやうですもの。でも私滅多に戸外に出ないから當り前なのかも知れませんけれども。今度から私もつと氣をつけますわ、ほんとに」

又お、べん、ち、や、ら、をいふ、と僕はM子を苦々しく思ひながら、胸の中はゴム毬の様にはずんでゐた。

僕は家に歸るとすぐ部屋に這入つて、脂でしと／＼になつた手の平を、洗ひたてのハンケチで念入りに押し拭つた。そのハンケチに乗り移されたM子の前髪の匂ひは長い間消えずに、僕の机の引出しの中で匂つてゐた。

その晩から僕は激しい戀の病にかゝつてしまつたのだ。さうだ戀の病といふ言葉が一番適はしい。戀に落ちたと云つた位ではその頃の僕の心の状態ありさまをはつきりと現はしてはゐない。ふつと氣がついて見ると僕はどの瞬間にもM子の事ばかり思つてゐた。その戀は、僕が今まで軽く味つて來たやうな、清いローマンチックな、その代り、美しい夢として置いてもそれで済ませて行けるやうなものではなかつた。肉にまで喰ひ込んで行かなければとても満足しない、極めて現實的な、そこいらに澤山ころがつてゐるやうな戀だつた。唯とそれは病と云はなければ適當しない程執心の深い戀だつた。

尤もかうなつて行くには或る時間の経過を必要とした。のみならず私の心持は不思議だつた。私はM子その人に執着したといふよりも、M子が他人に占領されるのを思つただけでも我慢してゐられない、その不思議な競争心

ともいふべきものに執着してゐたやうだ。これは勿論今になつてその當時を回想しての判斷だ。一體ワイニゲルのいひ出した婦人の二種の典型、即ち家婦型と娼婦型との中で、娼婦型の女はその魅力を女自身に備へてゐるといふよりは、その周囲を取り巻く男とその女との關係の間に持つてゐるやうだ。さういふ女は不思議に男の羨望と嫉妬とを挑發する事に妙を得てゐる。さういふ女は屹度總てのものを逆用する。何時でも敵の刃を奪つて敵を斃さうとする。男は又奇怪にも率直な愛の發露をさしおいて、男の遺産なる争鬭慾の満足に異常な興味を寄せる。而して女を勝利品と心得て互に夢中になつていがみ合ふ。そのいがみ合ふ程度が強まれば強まる程、女はちつとしたまゝで、男達の心の中にすん／＼魅力と價值とを増して行くのだ。縱令ひその女が一人の男の所有に歸した後でも、さういふ女が男に對して取る手段に變りはない。男に與へる不安定の感じだ。男は女自身を愛するといふよりもこの不安定な心持から自分を救ひ出さうとする爲めに藻掻き苦しんで、その女を全然占領し盡さうとあせるのだ。

ワイニゲルは客觀的に女の二つの典型の實在を主張してゐるやうだ。それは或る程度まで争はれない事實だとしても、大部分は問題となつた男と女との間に自然に生ずる關係から來る事だと云つた方がいゝ。例へばM子は或る他の男に取つては家婦型と云ふべき女かも知れないが、僕に取つては確かに娼婦型の女だつたのだ。いはばM子は僕の苦手だつたのだ。M子と結婚してから後でも、冷靜に考へる時には、僕はこれだけの事をはつきり了解してゐた。それなのに實際を見る。僕はとう／＼こんな置手紙を書くべき運命に迫ひつめられてゐるのだ。

……何んといふ醜態だ。

一徹で、極端な内氣で、妙に片意地の強い二十歳といふ無經驗な當時の僕は、歌留多會の晩から、見も知らぬ悒鬱な世界にどん／＼深入りして行つた。何事も見漏すまい聞き漏すまいと隣りの二階家に注意を怠らなかつたにも係はらず、その後暫らくの間、M子の姿なり聲なりは夢にも捕へる事が出来なかつた。唯々その家の井戸端に干される洗濯物の中に、M子のものらしい下着の類を見出した時だけ、僕はM子を想像で垣間見るばかりだつた。

ある日——それは板塀に沿うて植ゑ込である灌木の類の病葉が落ち盡して、それが土と同じ色になつて二寸もある霜柱の上に終日乗つたまゝになつてゐるやうな、惨めな、暗い、二月の或る夕方だつた——僕は書見に厭きたやうな體で、いつもの通り眼と耳とを極度に働かしながら、その癖放心した顔付をして、隣りに近い庭の隅をぶら／＼歩いてゐた。と、突然隣りの家の二階の窓障子が開いた音がした。それまで地面ばかり見つめてゐた僕は、つと思つて眼ざとく音のした方へ顔を上げた。その途端に障子はもう半分締められてゐたが、M子らしい女の人の姿が、確かにちらりと視覺に觸れた。同時に葉書の半分程の大きさの紙切れが、可なり早い速力で窓を離れて僕の家の庭の方へ落ちて來た。火のやうな氷のやうな棍棒形をした何物かが、不意に小痛い程ぶつかつて來て、心臓をどきんと下から押しひしやげたと思ふと、體中の脈搏が苦しい程高まつたのを僕はまざ／＼と感じた。紙はそこに落ちてゐる。然し僕はさ／＼にそれを拾ひ上げる勇氣を失つてゐた。M子がどこからかそつと見てゐないとも限らないと思つた。それは僕の心を全くしやちこばらしてしまつた。その紙を拾ふのは夜になつてから